

アートとイベントの関係に関する基礎的研究

大阪芸術大学 芸術計画学科 教授 田之頭一知

今日、様々な藝術祭が世界の各地で開催されている。身近なところでは瀬戸内国際芸術祭があり、海外に目を向ければクラシック音楽を中心とした世界最大の音楽祭 The Proms など、目白押しと言ってもよいような状況である。このような藝術祭はその開催スタイルから見れば、イベントの範疇に入るものと考えることができ、その内容としてアートの領域に属するものを取り上げるというかたちを採っていると言ってよい。

ここでイベントを英語で言えば、「出来事」が根本的な意味である“event(s)”となるが、この語は基本的に「好ましい出来事、大切な出来事」に関して用いられる。したがって日本語で言うイベントには、日常のルーティーンとは区別される出来事であって何らかのかたちで注目されるという要素が含まれてくることになる。日常の時の流れに節目をつけ、日常生活をいわば造形する働きがイベントにはあるという点が重要なのである。ここでイベントの定義に目を向けるならば、一般社団法人日本イベント産業振興協会に従えば、「イベントとは、非日常を設定し、複数以上の人間を集め、時間と空間を共有することで、ある目的を達成する手段として実施する行事・催事のこと」であり、アンドリュー・スミスによれば、「イベントとは、期間限定であることと場にフォーカスしていることによって最終的には定義される、ある特定のテーマを持った行事(occasions)」（*Events in the City: Using Public Spaces as Event Venues*）となる。これらの規定から見いだされるイベントの特質は、期間と場所を限定して日常とは異なる時間・空間を設定することで非日常的世界を創出し、その世界に多様な人々を招き入れるという点にある。この非日常的世界の創出が何らかの目的を達成し実現するための手段となっているという点を考え合わせれば、イベントの根本的な目的は、あるテーマを設定することによって、日常生活における人の繋がりがあり方とは異なる新たな繋がり創出にあり、その点で、地域横断的あるいは社会横断的な人と人の関係構築を目指す点に求められると言えるだろう。

一方、アートとは、少なくとも、私たちがみずからの感じる働きによって捉えることのできる具体的なもの（いわゆる作品）を制作する活動のことである。アートに関しては、その言葉の根源にまで遡って、古代ギリシアのテクネー（τέχνη）すなわち制作活動全般の土台たる技術をその背景に持つ振舞いであることを踏まえておく必要がある。この技術に支えられることでアートは、私たちが自身の感性の働きで捉えることのできる具体的なもの、すなわち「作品」を制作する活動となる。ここで作品とは何か、という美学的・藝術哲学的問題に立ち入ることはしないが、明確に言えることは、アートには必ず「作品」と「作者」が存在するという点である。この場合の作者は、その名が不明であっても構わない。作品には何らかのかたちで作者の刻印・痕跡が認められるという点が肝要であ

り、作者とは、作品の内容規定すなわちテーマに関わるレベルで捉えられるものであって、作品制作に際し作者はテーマに関して「解釈」を行なう存在なのである。アートにおける作品制作は、したがって、テーマに関する作者自身の解釈を、具体的なかたちにして表明する振舞いであり、物質的素材を用いて解釈にかたちを与えることによって行なわれるとすることができる。このアートにおける「解釈」の重要性を考慮に入れたとき、アーサー・ダントーのアートワールド理論が大きな手掛かりを与えてくれる。

ダントーが論文「アートワールド(“The Artworld”)」で展開した考えに則るならば、ある制作物をアート（ないし藝術）として規定するのは、その制作物に内在する美的質によるのではなく、その制作物がアートワールドに組み込まれることによる。そのアートワールドとは、「藝術理論の雰囲気(an atmosphere of artistic theory)」と「藝術の歴史についての知識(a knowledge of the history of art)」によって構成される“動的な場”であると解され、こう言ってよければ、ある制作物に対する言説的实践としての解釈行為が、何かしらの制作物をアートにおける作品として規定することができる。したがって、ある制作物をアートたらしめているのは、何かしらの特性をその制作物に付与し続ける言説的な振舞いなのであり、その言説のありようが変化すれば、制作物たる作品のありようもまた変化することになる。こういう言い方が許されるならば、ある制作物ないし作品を取り囲んでいる場のしつらえ方によって、当の作品のありようもまた変化することになるのである。とすれば、何かしらの目的をもって新たな人の繋がり創出を目論むイベントの内容としてアート作品を用いる場合、イベント領域とアートワールドは言うまでもなく異なる領域であるので——アートには作者が存在するが、イベントに作者は存在しない——、アートワールドの作品はその外部の世界へと移行行くがゆえにコンテクストが変化することになり、別の言説的特性がその作品に対して付与されることになるはずである。すなわち、アートワールドの作品は、イベント領域へと移住することによって新たな言説をまとうことになるのであり、そこにアートイベントという領域が独自に形成される基盤があると考えられるのである。

この点を踏まえるならば、アートイベントは、ある目的を持ったイベントの重要な構成要素として、アート作品たり得る制作物を用いることによって、そのイベントにおいて、あるひとつのアートワールドを形作ることを可能にするものであると言えよう。すなわち、アートイベントは、当の制作物に対する何らかの解釈行為を誘発し得るものとして、大なり小なり日常とは異なる非日常的世界を構築しようとしていると考えられるのである。